

## 連載「ジオと喜界島」

### 第7回「ジオと遺跡」

喜界島サンゴ礁科学研究所 土田 梨恵

今回は、喜界町埋蔵文化財センターにお勤めの松原信之さんにジオ（大地）と遺跡についてお話を伺いました。

—喜界島での発掘調査では、どのようなことがわかっているのですか？—

松原：遺跡の規模から見て、縄文時代から喜界島は人々が集まる島であるということがわかっていますね。また、サンゴ礁の資源を利用していることもわかっています。海で取れる貝や魚をとって生活をしていたとか。

石器もたくさん出てきますが、石器の石材はどれも喜界島には無いものでした。つまり、遺跡から出てくる石器はどれも喜界島の外から人が運んで来たものと考えられます。なので、この時代からかなり盛んな人の動きがあったのだと思います。

—喜界島の遺跡の特徴、特にジオとの繋がりがありますか？—

松原：縄文時代でいうと、喜界島と奄美大島の笠利の遺跡が非常に似ています。「海は文化をつなげ、山はへだてる。」という言葉がありますが、本当にその通りだなと思いました。遺跡の立地は他の島と比べて喜界島は

非常に恵まれていて、段丘があるからこそ人が集まっていた島であると感じています。崖の上に平らな面がある、段丘があることで、敵からの守りにもなり、海を見て様々な情報を得る場所として非常に役に立っているんです。

また、海から離れた高い場所には生活に必要なわき水も多く、通常水場にはハブが集まりやすいといわれますが喜界島にはハブがないので、他の島と比べても人が集まり生活しやすい環境が昔からそろっているんじゃないかな。だから、喜界島に非常に遺跡が多いのだと思います。

—今後の夢はありますか？—

**松原**： 僕の夢は、喜界島出身の遺跡発掘担当を生み出すことです！  
僕らのような島外からの人と、喜界島出身の人とで遺跡についての色々な意見を話し合えればいいなというのが一つの大きな夢です。

今あるものを守るのも僕たちの任務ですが、島の子供たちが活躍する仕組みづくりも大きな仕事だと思っています。

